「石垣原合戦」特集記

石垣原合戦と豊後永冨家

北的ヶ浜町三の八　永　冨　　忠

豊の国、豊かで麗しいこの国の山河は、私達に安らぎと信頼、希望を与えてくれます。こんにちの大分県のうち、律令の時代より豊後と呼ばれた地域は、貴族政治の腐敗から訣別し、新しく鎌倉幕府を開いた源頼朝の直轄知行国となったいきさつから、頼朝の流れを汲む大友氏が四百余年もの長い間引き続いて治めてきました。

大友氏は、初代能直より二十一代宗麟時代まで、その最盛期には九州の大半を勢力下におく大友王国とも言えるほどの大版図を築き上げます。では、いかにしてそのことが成ったのか。それは、一族一統で大友主家に忠誠を誓う心の強い鎌倉武士、そして大友家臣団によって支えられていたからに他なりません。

この家臣の中に、豊後永冨家があります。大友二代親秀の長男が三代頼泰、次男が戸次次郎左衛門尉重秀で、その重秀が永冨家の祖であります（永冨家略系図参照）重秀は、宝治二年正月「八鉾社」を勧請しました。七百年もの歳月を経て、今も稙田高瀬（現大分市内）に社はあります。

文永十一年（一二七四）・弘安四年（一二八一）に蒙古襲来があり、頼泰は博多警固のため、席の温まる間もない多忙な生涯を送りました。頼泰が自ら常楽と名付けた菩提寺「常楽寺」を永冨家十代丹後守國春の舎弟が寺僧となり、山門を守ったと寺記は伝えており、寺は遥かなる古都鎌倉に向かい建っております。この霊山のふもと稙田高瀬の地が我ら永冨家発祥の聖地であります。弘安八年（一二八五）の豊後国図田帳には稙田荘永冨名（名は明田、年貢・課役賦課の田畑）の記載が認められます。

南北朝の混迷の時代、高崎山城や玖珠城の合戦など、大友氏も家中を二分して争う厳しく長い年月を過ごします。永享十一年（一四三九）大友十四代親隆のもとへ、永冨家八代三河守義光（永冨家略系図参照）の娘が嫁ぎます。親隆の娘は、十五代親繁の室となります。親隆は治世わずか五年で甥の親繁に譲り、乱世改革の方策としました。親隆は仏心篤く、稙田に西光寺、緒方に宝生寺を創建し隠居します。その後大友家においては、二統交互のむずかしい相続を、嫡子単独相続制に改め、定着させます。

大友時代も中葉期となりますと、十六代政親・十九代親治の家老の一人として、永冨繁直が二代にわたり勤めたことが史料に残されていて、永冨家は、主家大友に対し忠勤怠りなく仕えたことが伺い知られます。「汝正直に志し、神意に叶

永冨氏略系図

- 大友親秀
  - 重秀（戸次次郎左衛門尉）
    - 一 能方（松岡丹後守）
    - 四 継親（大冨右京大夫）
  - 二 能親（大冨伊予守）
    - 三 能長（大冨丹後守）
    - 五 親行（大冨大和守）
      - 六 親喬（内蔵頭）
        - 七 親康（筑前守）
        - 十一 国光（永冨大和守）
  - 八 義光（三河守）
    - 九 義延
      - 十 国春（永冨丹後守）
      - 十一 国光（永冨大和守）
  - 十二 定連（永冨丹後守）
    - 十三 国定（永冨丹波守）
      - 十四 国政（永冨弾正忠）
- 十五 鑑次（永冨六郎、刑部少輔）
  - 鑑国（永冨与右衛門尉）
  - 鑑俊（永冨九郎）
  - 十六 統継（永冨源十郎）
    - 統重……

故、名を『永冨』とせよ」との夢のお告げがあったと由来書に書いてあります。

時は移り、秀吉の朝鮮出兵に豊後より渡海した七四四名の中に、永冨与右衛門と九郎の名が見られます。「豊後侍着到記」が永冨家古文書に遺されております。

秀吉が世を去り、天下は大坂方か徳川方かの世を二分する趨勢となります。当時豊後は、朝鮮戦役での失敗により大友義統が除国とされ、新しい領主が治めておりました。大友旧臣達は領地を失い盟主をも仰げず、伝来の地において一族郎党共々に農耕漁撈に精を出し、天与の作物を分かち合い、争いのない穏やかな日々を送っておりました。その春秋は、既に七たびを重ねておりました。

そのころ義統の長男義乗は江戸牛込に住まいし、家康に仕えておりました。義統とその妻及び二男正照の三人は、京都本能寺で安寧に暮らしておりました。そのような時に、妻子が三成方の大坂城へ拉致されます。戦勝ののちには旧領豊後を復するとの密約で促す石田・毛利らの大坂方につくか、新しい武家政治を創ろうとする徳川方につくか……。時の流れのただ中へと流されていき、風雲は急を告げておりました。鎌倉以来の名門大友家の社稷は七年前に失っているので、静かな暮らしの中に突然大きな時のうねりが押し寄せて来たことになり、大友旧臣達の心は悩み苦しみます。四百年もの長

い歳月、大友主家より受けし多大の恩顧、一族郎党と共に生きてきた栄枯盛衰、旧臣達の思いや如何に……。

このとき、大阪城へ拉致された妻子を迎えに赴いた使者の中に、永冨鎮並の名が見られるのです。義統は結局、豊後へ帰り立石に陣を張ることになります。旧領豊後で再びお家再興が成るかも、の夢……。旧臣達は日を追うごとに、一命を主家大友に預けよう、そして潔い死をと憧憬する豊後武士の誇りとものふの猛る魂が蘇ってきたのでしょうか。老体に鞭打つ者、血を沸らせる若武者、立石台へと参陣した人々は、正にそのような人達でした。

永冨家においても、源十郎統継、与右衛門、九郎の三兄弟が出陣します。死をもって大友主家へ最後の忠誠を誓ったのであります。

三人は、生前に建立する「逆修墓」（写真参照）を隠棲していた地の野津原郷に造立します。兄源十郎を中央にし、右に与右衛門、左に九郎の三基の石塔はあたかも大丈夫な武人が並んで立っているように、四百年もの風雪に耐えて今日もなお塔に託した切なる願いを偲ばせてくれます。

立石の要害を陣所に定めた大友軍と中津を発した黒田軍は、かって朝鮮出兵では共に戦った同志でもありました。

慶長五年（一六〇〇）九月十二日夜半、陣中冴え渡る月光の下、三兄弟は今生の別れの杯を交わしました。明けて十三日払暁、石垣原合戦の火ぶたは切って落とされました。大坂方将兵七、八百、黒田方三千程と言われております。鏑矢を放ち合う開戦の儀式。礼を弁えた武士の荘厳華麗な合戦絵巻が展開されたのであります。我こそはと名乗りを上げ、名こそ惜しけれと、ここを先途に獅子奮迅の戦いぶりでありました。命を賭けた男の晴れ舞台でもありました。壮厳で壮絶な儀式の終焉により、やがて戦いは終わります。もののあわれを知りたるよき人、豊後武士の最期の姿がそこにありました。

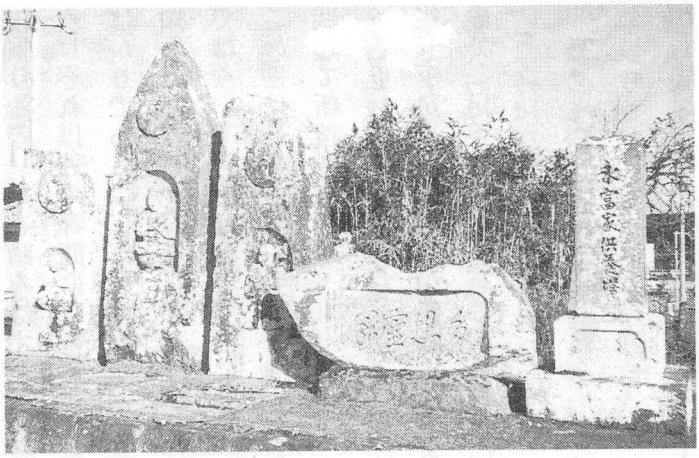
大友旧臣の忠魂は、悠久の時の流れの中、鶴見原と石垣原の自然の暖かい腕に抱かれて永久に消えることはありません。吉弘統幸、宗像掃部また斃れ、永冨与右衛門、九郎は共に討死。出陣した野津原郷士四二名中一九名が討死したのであります。源十郎は帰郷してのち死者の数の五輪墓を造り、霊を弔い供養し続けたと伝えられています（写真参照）。「多恩院」という寺院跡が野津原に残されており、この多恩という言葉に重い意味が感じられます。四八才で石垣原に出陣した源十郎でしたが、当時としては珍しく九六才までも生き残りました。彼は、何で死なれよう、死んでたまるものかと強い信念で残された人々の長老として采配を揮い、天寿を全うしたと伝えられています。

「弓矢取る身の習」「武士道」は、古来より日本人の道、人間の正しい生き方の指針の一つとされてきました。それには

神道、仏教、儒教、禅の教えが深く影響しているように思うのです。社殿の奥には、正しい人の姿を写す鏡があります。山川草木悉皆成仏、この世に生きとし生ける全ての命は等しく仏になれると教える仏教。仁義礼智信、長幼の序、君に忠、親に孝、心に矜持を持てと諭す儒教や禅の教え。また幼少時より、昔話やお伽噺として悪いことをすれば地獄へ落ち、良いことを行えば極楽へ行けると語り続けて来ました。勧善懲悪を体で覚えて来たのです。

かってこの国、日本人の心の内には、人間として最低の社会規範を守るうるわしい精神、淳風美俗が厳然と存在しておりました。日本人の世界に誇れるこの大切な心が、いつの頃からか失われつつあります。昭和期も戦後、経済の効率のみを追い続けて精神の所在を見失い、心の充たされない空しさが今日人々を不安不透明にし、拠りどころを失わせていると考えられます。このような時にこそ今一度、日本人としての誇りと自信を取り戻し、かっての淳風美俗を思い返し、僅かずつでも実行することが出来るならば、この国の未来も明るい光が差すのではないでしょうか。

石垣原合戦に臨んだ大友旧臣らの精神的土壌を郷土の誇りとして、大切に慈しみ正しく伝えることが私達の務めだと思います。



永冨家逆修塔（野津原）

永冨刑部少輔源十郎国春墓碑名